



# 蛾

11月14日

Sudden Fiction Project

高階經啓  
hirotakashina

## 11月14日のおはなし「蛾」

爪を剥がされてぼくは相手が本気だということがわかった。ようやくわかった。あまりの痛み  
に熱い涙がぼろぼろあふれ出し頬を灼いた。声は出なかった。正確には声を出せなかっただけな  
のだが。相手はぼくの様子をじっと観察して、何を思ったか満足気のため息をもらし頷いた。そ  
の時ぼくはほとんど失神しかけていたのだが、不意に男の行動が気になり始めた。屈み込んで足  
元の鞆を開けてガチャガチャ音を立てている。まだぼくが黙秘を決め込んでいると思っているに  
違いない。拷問し甲斐のある相手だとでも。冗談じゃない！

ぼくはにわかに目を開き、足元の男を蹴り倒そうとした。けれども足は男を通り過ぎてしま  
い、その勢いでぼくは宙に浮かび上がる。いやそうではない。振り向くとぼくは相変わらず椅子に  
縛り付けられていて、のけぞった顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃになっている。背もたれの後ろで  
縛り付けられた手のうち、右手の人差し指の爪がなくなっていて赤黒くなっていまなお出血して  
いる。下に落ちているのが人差し指の爪だろう。

男は鞆から道具を取り出すと、ぼくの足元に並べ始める。あんなの全部蹴飛ばせるのに、と思  
うが、いまのぼくは天井付近にいて、足を動かすことができない。椅子に縛り付けられたぼく  
はうすら目をあけているのだが、その目は何かを見ているのかいないのか、ゆっくり右へ左へ  
と単調な振り子運動を繰り返すだけだ。ぼくはあそこでああして縛られているのに、同時にこ  
うやって見下ろしている。これはいったい、と思いつつ、頭のどこかで幽体離脱だと納得もして  
いる。

男はぼくのズボンのベルトをゆるめ、ジッパーを開け、ショーツと一緒に引きずり下ろし、ペ  
ニスをつまみ上げる。睾丸の皮膚をつまみ上げると、いきなりそこに針を突き立てる。椅子に固  
定されたぼくが目がかッと見開き、全身に痙攣が走る。男は全く構わずもう一本針を突き立  
てる。2本の針にはコードがついていて、それが電流を流すためのものだということがわかる。天  
井付近のぼくにはわかるが、椅子付近のぼくにはわかっていないと思う。わかる方がいいのか、  
わからない方がいいのか微妙なところだ。椅子付近のぼくにとっては2本の針を刺されただけで十  
二分な苦痛のようだから。

男はコードを小さな装置につなぎ、何か言った。けれどもそれはあまりよく聞き取れなかつた  
。恐らく必要な情報をしゃべるまで、こういったことが続くのだと警告したのだろう。でもそれ  
は聞こえず、天井付近のぼくに聞こえないのはもちろんのこと、椅子の上で半分失神しているぼ  
くにも聞こえるはずはなく、だとすると拷問はこのまま続くところまで続くことを意味する。ぼ  
くからは何の反応もないのを見て男は手元の装置のダイヤルを回す。

椅子が倒れそうなほどにぼくの身体がびくびくと反応し、首から上が取れてしまいそうに上体  
がぐらぐら揺れた。目が白目をむきはじめている。男は息一つ荒げるでなくその様子を見てい  
たが、睾丸の表皮に刺した2本の針のうち1本をにわかに引き抜いた。椅子の上のぼくがまた飛び  
はね、天井付近のぼくも目をそらしてしまった。次に見ると男はペニスの包皮をつまんでそこに  
針を刺し直しているところだった。さきほどの痛みがひどすぎたせいか、椅子の上のぼくは特に  
反応を見せない。

男が再びダイヤルを回すと椅子の上のぼくは全身小刻みに痙攣し始め、それがあまりに素早く  
あまりに細かいので、見ていると、ぼくのからだの輪郭がよくわからなくなる。まるでからだ  
が周囲の空間ににじみ出すようなのだ。目がぐるっと上を向いて白目が飛び出しそうになり、声  
を上げ始める。叫び声ではなく、どこから出てくるのか細く長い声だ。口元には泡が吹き出し  
ている。男がダイヤルを戻すと、ガタン！と椅子が激しい音を立てて、ぼくの身体は輪郭を取り  
戻し、ただし完全に脱力して首も肩も上体もこれ以上ないほど、ぐんにやりと垂れ下がっている  
。ペニスだけが見たこともないほど勃起している。わけがわからない。

男はそのペニスに目をつけ、新しい道具を鞆から取り出す。それはストローほどの長さ  
と細さ

の金属棒で、まわりにギザギザとした細かいトゲが無数についている。やすりのようなものだろうか。男は何のためらいもなくその金属をぼくの尿道に押し込みはじめ、椅子の上のぼくが再びのけぞる。そのとき突然、男が急に素早く右手を振った。何の脈絡もない、異様な動きだった。見ると一匹の蛾が男の目の前をちらちらしながら飛んでいる。白っぽく不思議とぬめっと光るその蛾は、あたりじゅうに鱗粉をまきちらしぬたぬた、ぬたぬたと、重たそうに飛ぶ。再び男は蛾を追い払おうとし、妙な声を出した。

この冷徹な拷問執行人は蛾がお嫌いらしい。天井付近でぼくはうっすら笑い、同時に数千匹の蛾となって男に襲いかかった。ぼくは天井付近を漂いながら無数の蛾となり、同時に椅子の上で覚醒していた。いまや男は全身をびっしり蛾に覆われ、絶叫していた。ちらっと見えた男の目は恐怖に見開かれ、その絶叫する口の中に飛び込んでいく蛾のために息をすることもできないようだった。男はかたわらの別な椅子に倒れ込み、そのため下敷きになった百匹あまりの蛾がいやな音を立ててつぶれ、それがますます男を錯乱に追い込む。何をしたいのか両腕を突き出し、足を踏みならす。そこに白い蛾がびっしりとにつき、それを見てぼくは何か似ていると思う。

あたりを飛んでいた蛾がいなくなり、天井付近のぼくもいなくなり、椅子の上でぼくは目を覚ます。右手の人差し指の爪を失い、ペニスには2本の電極を刺され、尿道には金属棒を突き立てられたまま。痛みをこらえて男の姿を探す。足元に黒くてごつい革の靴が大きく口を開けたままだ。部屋の中を見回すが、男のいる気配はない。最後に男が座っていた斜め前の椅子にまだ蛾が何匹かとまっているようだと思うがそれは蛾ではない。白い、生き物めいた花だ。椅子の上にはなぜか胡蝶蘭の鉢が置かれている。

(「胡蝶蘭」 ordered by kyouko-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

蛾

<http://p.booklog.jp/book/38896>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/38896>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/38896>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.